



大学の英語教育改革×TOEIC® Program

2017年7月28日(金) ベルサール半蔵門イベントホール



大学の英語教育改革×TOEIC® Program

2017年7月28日(金) ベルサール半蔵門イベントホール

事例発表 ① 広島大学 1

広島大学スーパーグローバル事業での TOEIC® Programの活用およびCan-Doリストの開発

法学部 教授 副理事(スーパーグローバル大学創成支援事業担当) 西谷 元 氏
外国語教育研究センター 准教授 鬼田 崇作 氏

事例発表 ② 京都産業大学 9

京都産業大学の共通英語プログラム改革

共通教育推進機構 全学必修英語教育主任 教授 松永 舞 氏
共通教育推進機構 コーディネーター 准教授 白杵 岳 氏

事例発表 ③ 東京都市大学 16

「実践的な専門力を有した国際人」を育成する 東京都市大学オーストラリアプログラム「TAP」

国際部 部長 程田 昌明 氏

Q&Aセッション 23

広島大学スーパーグローバル事業でのTOEIC® Programの活用およびCan-Doリストの開発



西谷 元 氏



鬼田 崇作 氏

第1部 スーパーグローバル大学創成支援事業におけるTOEIC® Programの活用

法学部 教授 副理事(スーパーグローバル大学創成支援事業担当)
西谷 元 氏

■ トップ型のスーパーグローバル大学として

広島大学は11学部11研究科からなる総合大学で、約1万5,000人の学生が在籍しています。現在、スーパーグローバル大学創成支援事業トップ型事業をはじめ、研究大学強化促進事業、世界展開力強化事業などのさまざまな国際化・研究力強化事業に取り組んでいます。その中から、大学全体の取り組みとして、スーパーグローバル大学創成支援事業でのTOEIC®

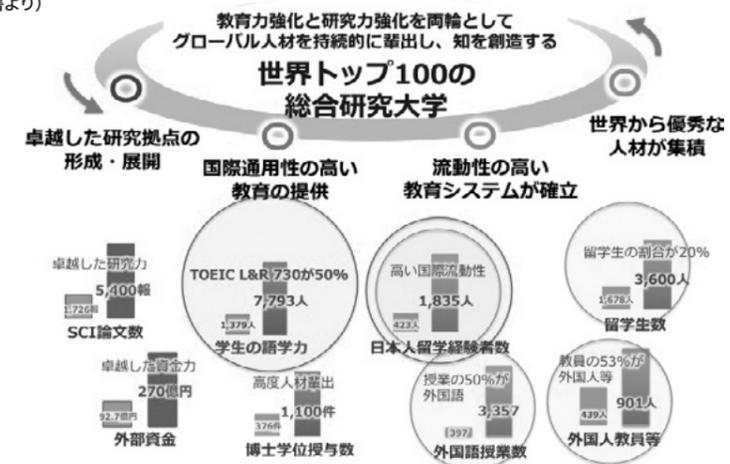
Programの活用についてご紹介させていただきます。

広島大学トップグローバル大学構想(資料1)の最終目標は人材育成ですが、語学力の強化はこの目標を達成するための重要な手段の一つです。そのため、外国人教員等を増加させることによる外国語授業数の増加また留学生割合の増加など、内なる国際化のためのさまざまな施策を進めています。外部試験を活用した客観的評価に基づく語学力強化の検証は、日本人留学経験者数の増加のための重要な施策の一つであると考えています。

文部科学省の資料では、トップ型を獲得している大学は首都圏の大学または地方の旧帝大で、それ以外では広島大学のみとなっています。獲得することができた要因の一つとして、広島大学がさまざまな取り組みを積極的に進めてきたことが挙げられると思います。

(資料1)

トップグローバル大学(構想調書より)

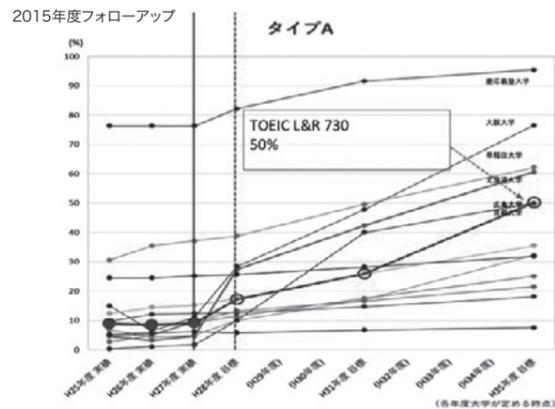


■ 全学生の半数がTOEIC® Listening & Reading Testで730～780点となることを目指す

スーパーグローバル大学創成支援事業採択校は毎年フォローアップ資料を提出することになっており、それに基づいて作成したのが（資料2）です。

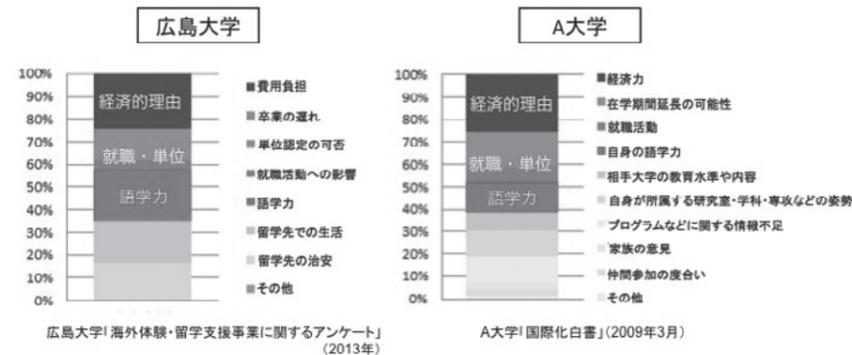
（資料2）

SGU目標：語学レベルの測定・把握、向上



このグラフは、2023年度の語学レベルの目標に対する現在の達成状況を表しています。本学の目標は、50%の学部学生がTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) のスコア730レベルの語学力を有することですが、2015年度のフォローアップではおおよそ10%という数字が出ました。目標を達成

（資料3） 留学の阻害要因



→広島大学の場合、語学力を向上させなければ、留学経験者数の増加を見込むことができない。

するには、これから7年間で克服しなければならない課題が多くあるということが分かります。全学生の半数がこの目標を達成するには、個々の施策を散発的に進めては難しく、大学全体がこの課題に総合的かつ計画的に取り組んでいくことが必要です。

■ 語学力に対する不安が留学の大きな阻害要因に

広島大学が実施したアンケート調査等によると、留学の阻害要因として、大きく「経済的理由」「就職・単位」「語学力」の三つがあることが分かっています。他大学との比較でも、特に「語学力」に対する不安の差が大きく、広島大学においては、この点が留学、特に長期留学に行くための大きな阻害要因となっています（資料3）。

広島大学では、学生の語学力を把握・分析するため、TOEIC L&Rを過去15年間継続的に実施し、学生の語学力を把握してきました。2013年までは入学時から卒業時までの4回、全体の傾向が明らかになってきた2014年度以降は卒業時まで2回測定しています。現在では、上記の2回の指定受験（約4,400名）の他、全学年を対象とした年2回の希望受験（約2,800名）を含め、毎年全学生の約半数の7,200人が大学の費用負担でTOEIC L&Rを受験しています。

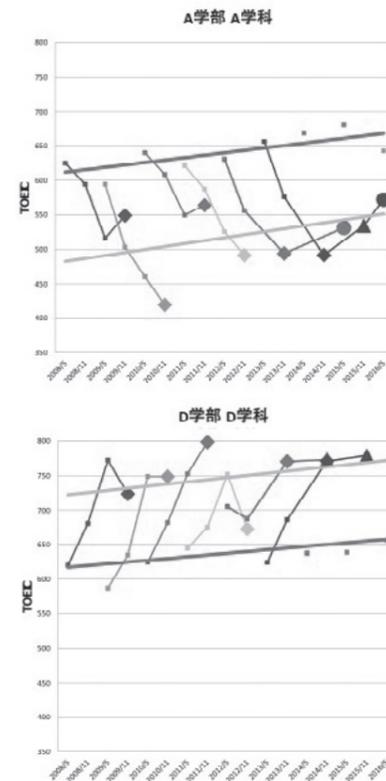
■ 同じ学部・学科のスコアは同じようなパターンで推移

これらの測定の結果によると、入学時の語学力は継続的に上昇しているものの、大学4年間のトータルとしては必ずしも上昇していないことが分かりました。2年生時は1年生時よりもスコアが上がる傾向にありますが、その後は概ね下がり、そのまま卒業していきというのが大学全体のパターンとなっています。

一方、学部別でみると、全くパターンが異なることも分かりました。特徴的なのは、学部・学科ごとにさまざまなパターンがあるものの、同学部・同学科では、毎年ほぼ同じようなパターンで推移していること（資料4）。さらに細かく分析し、学科内のコース別でもさまざまなパターンがみられますが、同じコースでは同様のパターンが再現しています。また、同学部・同学科でも個人差がかなり出ています。

（資料4）

学部別スコア分析



■ 学部や学科、個人それぞれに合った対策が必要

一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会の「2014年度IIBCセミナー報告書」では、TOEIC L&Rのスコアとセンター試験のスコアはある程度の相関はみられるものの（資料5）、必ずしもセンター試験のスコアがそのまま入学後のTOEIC L&Rのスコアに反映されるわけではないと述べられています。広島大学が独自に、過去10年間の本学の学生約2万人分のデータを分析した結果も同様でした。

以上の分析の結果、学部・学科や個人により語学力向上の動機や目標が異なるため、各学生個人に対応した策を講じる必要があるという結論になりました。グローバル人材の育成のためには、同時にグローバル・コンピテンシーを成長させることも重要なテーマです。広島大学では、グローバル・コンピテンシー測定のためにBEVI-jという臨床心理学に基づく客観的テストを使用しています。これらの総合的な取り組みが留学経験者数の拡大につながり、ひいては人材育成にもつながっていくと考えています。

そのためには、語学教育また留学プログラムといった個別の取り組みでは効果を上げることができず、入学時から学士課程全体の4年間、また学部によっては大学院を含む6年間について、大学全体としていかに取り組んでいくかが非常に大切になってきます。

（資料5）

センター試験との相関

	TOEIC Listening	TOEIC Reading	TOEIC Total	センター筆記	センターリスニング	センター合計
TOEIC Listening	1					
TOEIC Reading	0.662	1				
TOEIC Total	0.904	0.919	1			
センター筆記	0.474	0.614	0.599	1		
センターリスニング	0.506	0.469	0.534	0.55	1	
センター合計	0.521	0.632	0.635	0.981	0.701	1

■各個人ごとの到達期待値を設定

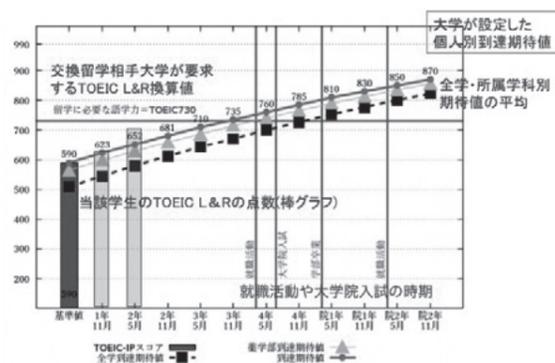
広島大学は、2016年から、全新生を対象に大学が個人ごとの語学の達成期待値を設定しています(現在では約5,000名が対象)。これは、入学直後に実施するTOEIC L&Rのスコアを基準として、半年ごとに、4年ないし6年間で最終的に達成してほしいスコアを設定したものです。個人別の成績開示HPに掲載されており、学部や全学の期待値の平均値も同時に表示しています(資料6)。

現在はそれに加え、eポートフォリオシステムのMaharaを使って各個人が独自に設定する目標値も準備中です。

例えば(資料6)の学生の場合、TOEIC L&Rのスコアが730まで達していないので、2年生の5月の段階では長期の留学に応募するのは難しいということになります。また、就職の時期、大学院の受験の時期などのタイムスパンや、留学のために必要な語学力などが分かるようにするとともに、期待値設定の根拠、勉強方法なども同時に表示しています。

(資料6)

個人別到達期待値(2500人/年)



■留学の選抜ではTOEIC® L&Rのスコアを重視

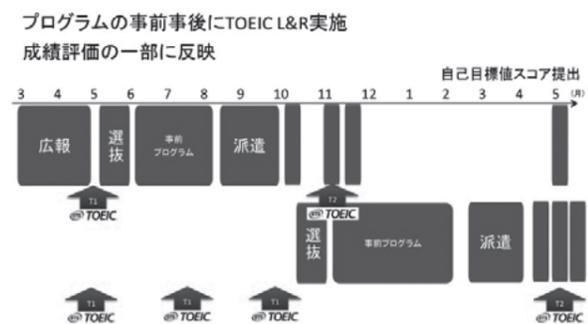
広島大学には、現在留学派遣プログラムとして、2週間の短期プログラムからダブルディグリーまで、50

近くのプログラムがあります。これらのプログラムにより、最終的には全学生の11.7%にあたる年間1,452名の日本人学生の派遣を目指しています。現在のところ、留学派遣者数はほぼ目標値通りの増加で推移しています。

その中の一つである2週間の短期派遣プログラムSTARTでは、新生の10%以上(今年度は288名)にあたる学生を海外に派遣していますが、その選抜にあたってはTOEIC L&Rのスコアを重視しています(資料7)。今年度から開始した2年生と3年生用の派遣プログラムSTART+では、個人別到達期待値を基準として、TOEIC L&Rのスコアを1年生からどれだけ上昇させてきたのかを主たる選抜要件にしています。

(資料7)

短期派遣プログラムSTART(2週間)



■個人ごと・グループごとにグローバル・コンピテンシー・レポートを配布

留学派遣時の選抜の際だけでなく、帰国した後もTOEIC L&Rを受験してもらい、語学力の変化を検証しています。その結果としては、約6カ月間で平均約40点スコアが上昇しています(資料8)。これは非英語圏でもほぼ同じです。

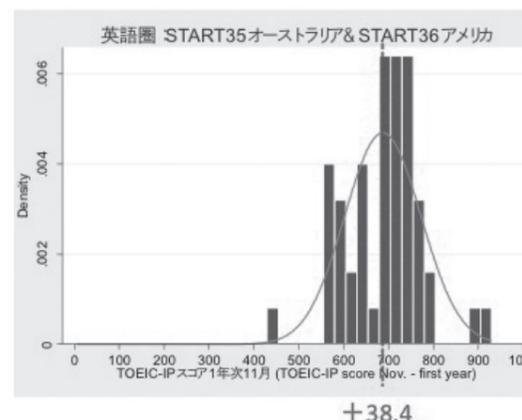
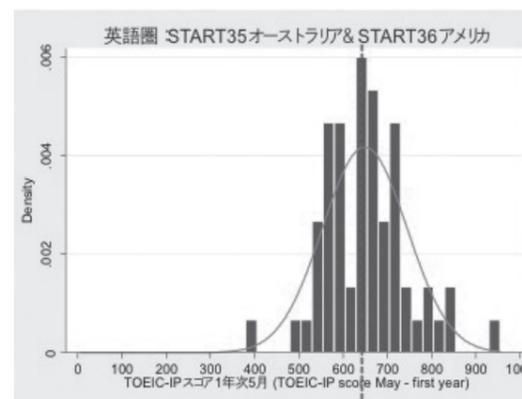
また、1年間のスパンで留学派遣者と非留学派遣者の語学力をTOEIC L&Rの結果で比較すると、たとえ2週間の短期プログラムであっても大きな影響を与え、非派遣者よりも語学力が向上することが分かっています。同時に、臨床心理学に基づくWebベースのテスト

(BEVI-j)も実施し、留学によりグローバル・コンピテンシーが客観的に上昇していることが判明しています。このテストの結果は、個人ごと・グループごとにレポートとして配布され、当該プログラムが有効であったかどうかを検証できる仕組みになっています。

このように広島大学では、1年生から4年生、大学院までの取り組みを大学全体で総合的に行うことにより、語学力の向上とグローバル人材の育成に努めています。

(資料8)

短期派遣プログラムによる語学力上昇(6カ月)



第2部 教養教育におけるTOEIC® Programの活用およびCan-Doリストの開発

外国語教育研究センター 准教授

鬼田 崇作 氏

■ 主専攻プログラムの約半数が8単位化に

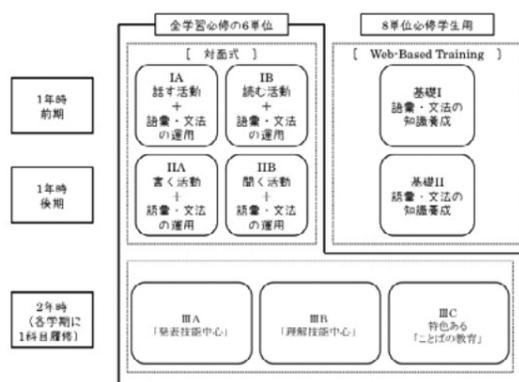
私からは、①教養教育におけるTOEIC L&Rの活用 ②教養教育におけるTOEIC® Speaking & Writing Tests (以下、TOEIC® S&W)の活用 ③広島大学英語Can-Doリストの開発についてご説明させていただきます。

私が所属している外国語教育研究センターは、1、2年生の教養教育を中心に、学内の外国語教育の責任部局として業務を担当しています。教養教育では、1年生と2年生の2カ年で6単位の修得を基本としていますが、約半分の主専攻プログラムがプラス2単位、合計8単位を必修とする8単位化コースとなっています。

この8単位化コースの英語カリキュラムは、1年次の前期がコミュニケーションIA(話す活動中心)とIB(読む活動中心)、後期がIIA(書く活動中心)とIIB(聞く活動中心)の二つを取り、2年次にはコミュニケーションIIIA(発表技能中心)、IIIB(理解技能中心)、IIIC(特色あることばの教育)の中から二つを選ぶ仕組みになっています(資料9)。

(資料9)

8単位化コースの2年間の英語カリキュラム



■ 統一教科書で自学自習と授業を関連付け

これらに加えて、8単位化コースでは、コミュニケーション基礎I・IIを必修科目として指定しています。基礎I・IIでは、単語と文法をWebで自学自習し、期末試験で単位を認定します。ただし、「Webで自学自習してください」と言うだけでは学生はなかなか勉強しないので、統一の教科書を使って対面の授業を行うコミュニケーションIB(前期)・IIB(後期)と関連付けています。また、基礎I・IIで使う語彙リストの一部(特に覚えてほしい単語)を統一教科書の単語とかぶらせています。

これらにより学生は、自学自習をした単語や文法が使われている教科書でIBの「読む活動」やIIBの「聞く活動」の授業を受けることができます。基礎I・IIとIB・IIBとは別の科目ですが、それぞれの内容を関連付け、有機的な統合を図ることによって、よりスムーズに、より効率的に勉強ができるようになります。

■ 授業でのテストとTOEIC® L&Rで成績評価

普通の授業の中で確認テストや小テストを行い、学期の最後にTOEIC L&Rを実施して成績を評価します。評価方法は、確認テストと小テストの合計およびTOEIC L&Rの結果をそれぞれ5段階で評価し、さらにその二つを総合して5段階の最終成績とします。

(資料10)の下の表は、縦軸が授業での取り組み(確認テストと小テストの合計)で、横軸がTOEIC L&Rのスコアです。例えば、授業でのテストを頑張ってS評価、TOEIC L&RのスコアがSであれば、最終成績はS。あるいは、授業ではあまり頑張れなくてC、TOEIC L&RがBであれば、最終成績はCとなります。このようにして二つを掛け合わせ最終の成績を出しています。

それらの結果、昨年の8単位化コース(データ欠損などを除いた有効データ712名)の成績をグラフ化すると、1年間で平均スコアが50点以上アップしており、また平均スコアだけではなく、データ全体がきれいに右に移って(成績が上がって)いるのが分かります。上

位層だけに引っ張られて平均が上がっている、あるいは下位層だけが極端に伸びて平均が上がっているのではなく、標準偏差が同じ程度で全体が移動しています。

(資料10)

TOEIC® L&R(成績評価)

①授業での取り組み		②TOEIC L&Rスコア				
・確認テスト: 40% ・小テスト(3回): 60% 以上を合計し、以下のように換算 90%以上 S, 80~89% A 70~79% B, 60~69% C 59%以下 D		7月のTOEIC L&R IPスコアを以下のように換算 600点以上 S, 500~595点 A 400~495点 B, 300~395点 C 300未満あるいは未受験 D				
		②TOEIC L&Rスコア				
		S	A	B	C	D
		600~	500~595	400~495	300~395	~300/未受験
①授業での取り組み	S 90%+	S	S	A	A	B
	A 80~89%	S	A	A	B	C
	B 70~79%	A	A	B	B	C
	C 60~69%	B	C	C	C	C
	D ~59%	D	D	D	D	D

■ 最上位クラスは少人数でクラスを編成

一方、前期のコミュニケーションIA(話す活動中心)と後期のIIA(書く活動中心)では、試行的にTOEIC S&Wも活用しています。

対象は1クラス14名の少人数化クラス編成にした選抜クラスの学生です。Hiroshima Special Program for English Communicationを略し、HiSPECと呼んでいます。各学部やブロックごとにあるHiSPECクラスを、外国語教育研究センター所属の英語母語話者教員が担当し、前期・後期を通して履修しています。

受験スケジュールは、入学直後にプレテストとしてTOEIC S&Wを受けます。そして前期のスピーキングクラス(IA)を受講した最後に、ポストテストとしてTOEIC® Speaking Testを受け、後期のライティングクラス(IIA)の最後にはポストテストとしてTOEIC® Writing Testを受けます。その間、8単位化コースの学生には、入学後(5月)・前期末(7月)・後期末(1月)にTOEIC L&Rが入ります。

■ HiSPECクラスでも1年後にスコアが70点アップ

その結果、前期の4~7月の間のスピーキングのスコア推移はあまり見られませんでした。後期のライティングは若干の伸びを示しました。

前期、後期にそれぞれ受験したスピーキング、ライティングの点数に関しての伸び率はそれほど大きくありませんが、5月、7月、1月全てのTOEIC L&Rを受けたHiSPECクラスの学生(有効データ41名)の成績をみると、1年間で平均70点ほどスコアを上げています。HiSPECクラスの学生は最上位の習熟度なので、成績を伸ばしにくいところがありますが、それでも少人数でクラス編成を行い、当センターの専任教員が授業を担当し、TOEIC S&Wを受けて頑張ると、他と同じように力を伸ばすことができるという結果が出ています。

■ 広島大学英語Can-Doリストを開発

教養教育の枠組みでは、どうしても授業の数に限りがあります。その中で広島大学が設定しているSGUの目標を達成するのは難しいので、学生には授業の外でも多くの勉強をしてもらうことが必要になります。

そのための一つの仕掛けとして、広島大学と一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会が共同開発したのが広島大学英語Can-Doリストです。調査対象者は、英語必修単位が8単位となっている主専攻プログラムを受講する、1年生の約1,000名(有効データ985名)です。

Can-Doリスト作成のための質問紙には、4技能(Reading・Writing・Listening・Speaking)に、人とやりとりする力(Interaction)と機能的表現力(Function)を加えています。回答は「全くできない」から「問題なくできる」までの5件法としました(資料11)。

(資料 11)

Can-Doリスト(方法)

- 対象
 - 英語必修単位が8単位の1年生約1,000名
- 質問紙
 - Reading, Writing, Listening, Speaking
 - Interaction, Function
 - 5件法(1:全くできない 2:ほとんどできない 3:かろうじてできる 4:ほぼできる 5:問題なくできる)
- データ収集
 - TOEIC L&R IP:平成28年5月14日(本試験), 28日(追試験)
 - 質問紙:平成28年5月12日~16日

■ 個々人の目標設定を支援するCan-Doリスト

Can-Doリストの活用には、大学入学時における英語力の把握と卒業時の目標設定があります。まず、1年生全員を対象に入学直後に実施しているTOEIC L&R 団体特別受験制度 (IP: Institutional Program) をもとに、Can-Doステートメントの形で入学時の英語力を提示します。これで学生は自分の英語力を客観的に把握することができます。また、卒業時にどの程度の英語力を得たいのか、どのような力をつけたいのか、そのためにはTOEIC L&Rでどれぐらいのスコアを目標にすべきかなど、個々人の目標設定を支援します。学生のモチベーションを高めるための一つの工夫といえます。

Can-Doリストと授業・教材との連携も有効です。授業を行う教員にとっては、TOEIC L&Rのスコアに加え、Can-Doで学生の英語力を把握することで、より効果的な授業設計が可能となります。また、学生にとっても、次のCan-Doレベルへ進むにはどのような授業を受ければ良いのか、どのような面を強化すれば良いのか、どのような教材を使えば良いのかなどの詳細な情報が提供されるため、より効果的な学習計画を立てることができます(資料12)。

今後は、Can-Doリストを精緻化し、学生が次のレベルへ上がっていくための教材を効果的に選択できるように整備・支援していきたいと考えています。

(資料 12)

Can-Doリスト(実践)

- 診断情報の提供
 - 1年次5月時点の英語力の記述
 - 「今なにができるか」
 - 授業担当教員への情報提供?
- 個々人の目標設定
 - 今後英語で何ができるようになりたいか → 何点を目指すべきか
 - 何点を取りたいか → 何ができるようになりたいか
- 授業、教材との連携
 - どのような授業を履修していくべきか
 - どのような教材を使用すべきか



京都産業大学の
共通英語
プログラム改革



松永 舞氏

臼杵 岳氏

第1部
新カリキュラムの概要

共通教育推進機構 全学必修英語教育主任 教授

松永 舞氏

■ 英語カリキュラム改革のポイント

京都産業大学は、文系、理系全9学部からなる私立の総合大学で、キャリア教育や就職支援、国際交流などにも盛んに取り組んでいます。2年前に創立50周年を迎え、現在1万3,053名の学生が在籍しています。

本日は、まずは私の方から、本学での英語カリキュラム改革の三つのポイントと2013年度からスタートし5年目となる新たな共通教育必修英語カリキュラムの概要を説明します。

本学での共通教育必修英語のカリキュラム改革には、大きく三つのポイントがあります(資料1)。

(資料 1)

英語カリキュラム改革のポイント



• 実用的な英語運用能力の向上

第一のポイントは、『TOEIC L&R Test + 英語コミュニケーション能力=使える英語』というコンセプトを基盤に、実用的な英語運用能力の向上に焦点を絞っているということです。具体的には、日本人が担当するクラスはTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) を導入し、ネイティブの先生が担当する科目は英語コミュニケーション能力の向上に絞り、“使える英語”に重きをおきました。

• 授業の質の保証

第二のポイントは、授業の質の保証です。必修英語科目は共通教育なので、どの先生の授業を取っても質が保証されていることが重要です。これを実現するために、シラバスの統一および統一教科書の使用、そして20名程度の少人数制クラスの編成によって、教員の目が学生に行き届くようにすることを目指しました。また、授業の質を保証するため、新たな雇用形態として、TOEIC L&Rの指導力が高い先生を実学英語講師として雇いました。TOEICの授業を担当する教員を対象に教員研修会 (FD) を開催し、新たな教授法などを教員が学び合える環境を整えています。

• 学習成果の明瞭化

第三のポイントは、学習成果を明瞭化することです。プレイズメントテストとしてTOEIC Bridge® Testを活用し、1年生、2年生の学年末定期試験としてTOEIC L&Rを実施するようにしました。これによって、2年

間の学生の学習成果が客観的なスコアという形で明示され、学生にとっても目標が立てやすい学習環境を整えるようにしました。

■ 共通教育必修英語カリキュラムの概要

次に、本学の共通教育必修英語カリキュラムの概要を説明します。本学の共通教育必修英語プログラムでは、外国語学部英語学科の学生と国際関係学科の学生の約200名を除く全学生を対象とし、約2年間をかけて教育するプログラムを実施しています。共通教育必修英語プログラムの2年間の全体像は（資料2）となります。

（資料2）

共通教育必修英語カリキュラム概要(2013年度～16年度入学生まで)

目標スコア	1セメ	2セメ	3セメ	4セメ	5セメ
上級英語 600点以上	プレゼンテーションⅠ TOEICⅠ	プレゼンテーションⅡ TOEICⅡ	ディスカッションⅠ TOEICⅢ	ディスカッションⅡ TOEICⅣ	
中級英語 500点以上	コミュニケーションⅠ TOEICⅠ	コミュニケーションⅡ TOEICⅡ	コミュニケーションⅢ TOEICⅢ	コミュニケーションⅣ TOEICⅣ	
初級英語 400点以上	コミュニケーションⅠ TOEICⅠ	コミュニケーションⅡ TOEICⅡ	コミュニケーションⅢ TOEICⅢ	コミュニケーションⅣ TOEICⅣ	
基礎英語 350点以上	プレ基礎英語 (選2コマ)	総合Ⅰ TOEICⅠ	総合Ⅱ TOEICⅡ	総合Ⅲ TOEICⅢ	
	TOEIC L&R IPテスト (7月) (受験料個人負担)	TOEIC L&R IPテスト (1月) 定期試験として実施 (受験料大学負担)	TOEIC L&R IPテスト (7月) (受験料個人負担)	TOEIC L&R IPテスト (1月) 定期試験として実施 (受験料大学負担)	TOEIC L&R IPテスト (7月) (受験料個人負担)

■ 習熟度別クラス編成

まず、入学時にプレイスメントテストとしてTOEIC Bridge Testを実施し、学生を一人ひとりのレベルに合わせて、基礎・初級・中級・上級に振り分けます。それぞれのレベルでの2年間の目標スコアは、基礎がTOEIC L&R350点以上、初級が400点以上、中級が500点以上、上級が600点以上となっています。1年次に最も受講生が多いのが初級で、今年度は40%ほどの学生が受講しています。

初級英語を例に挙げて、共通教育必修英語の学習内容を説明いたします。初級英語では、TOEICクラスは日本人の教員が担当し、コミュニケーションクラスはネイティブの教員が担当します。毎学期、それぞれの授業が1単位ずつあり、学生は2年間で日本人の先生によるTOEICクラスを4単位、ネイティブの先生によるコミュニケーションクラスを4単位ずつ受講することになっています。中級・上級も単位の配分は初級と同じです。ただし、上級のネイティブの先生によるクラスの学習内容は、より高度なものを設定しています。上級英語では、1年生はプレゼンテーションを中心に、2年生はディスカッションに焦点を当てた授業となっています。いずれにしても、TOEICクラスは週1回(2年間)行うだけなので、それほど多くの授業数があるわけではありません。

これに対して、少し異なるのが基礎英語です。基礎英語に割り振られた学生は1年次の前期に、文法などの総復習を行う「プレ基礎英語」というクラスを受講しなければなりません。このクラスは、週2コマを日本人の先生が担当し、必修英語であるTOEIC L&Rの授業を受ける前の準備段階として設けられています。この週2コマの授業を終え、1年生の後期から必修英語の受講が始まります。1年次の後期には日本人の教員による基礎総合力を高める授業やTOEIC L&R対策の授業を受講し、2年生になってからネイティブの先生のクラスも受講することになります。

定期試験に関しても、習熟度によって若干異なる内容を用意しています。1、2年生のほとんどの学生は、前期の定期試験として教員が作成したTOEIC L&R形式の統一試験を受けることとなります。ただし、プレ基礎英語の授業では、文法などに焦点を当てた内容の統一試験を実施しています。また、上級英語を受講している2年生は、ほとんどの学生が単位認定のため前期で必修英語を修了するということもあり、大学負担によるTOEIC L&R団体特別受験制度(IP: Institutional Program、以下IPテスト)が定期試験として実施され、上級英語を受講中の学生達にとって最終的な学習成果を確認する機会としています。一方、

1年生後期と2年生後期の学年末には、定期試験としてTOEIC L&R IPテストを実施し、大学がその受験料を負担しています。

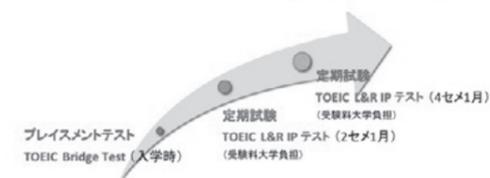
■ 上昇志向のプログラム

本学の共通教育必修英語では、TOEIC L&Rのスコアを活用した上昇志向の強いプログラムを目指しています（資料3）。これを共通教育必修英語のプログラムとして実現するために、二つの仕組みを設けました。

（資料3）

上昇志向のプログラム

TOEIC L&R IPテストでの上位クラスへの移行	TOEIC L&R IPテストによる単位認定制度
520点以上～: 上級英語へ	700点以上～: 6単位
400点以上～: 中級英語へ	600点以上～: 4単位
310点以上～: 初級英語へ	520点以上～: 2単位



・ TOEIC® L&R IPテストによる上位クラスへの移行

まず、TOEIC L&Rで一定のスコアを取れば、上のレベルのクラスに進めるような制度を設けました。この移動は学期ごとにはできません。具体的には、初級に上がりたいと思う学生は310点以上、中級へ上がりたいと思う学生は400点以上、上級へ上がりたいと思う学生は520点以上が必要であるという基準点を設けています。逆に、下のクラスに下がるという設定はしていません。このクラスの移動が最も多く起こるのが、TOEIC L&R IPテストが学年末に定期試験として実施される1年修了時です。実際に、2年次から多くの学生が上位のクラスを受講しています。

・ 必修英語の単位認定はIPテストのスコアを基準に

また、学生の学習モチベーションを高めるために、TOEIC L&Rのスコアを基準に必修英語の単位認定も行っています。これは英語力が客観的にスコア化されるTOEIC L&Rの特長から採用されました。具体的には、520点以上で2単位、600点以上で4単位、700点以上で6単位が認定されます。700点以上取得による6単位の認定ということは、1年生の前期で必修英語が終わることになります。プログラムを作る際には、どのぐらいの点数を取れば、必修英語としてのTOEICクラスを卒業しても良いのかということ話し合いました。その結果、次の選択科目や英語で履修できる科目に進めるボーダーラインとして、700点というスコアを設定しました。

本学では、まず入学時にTOEIC Bridge Testを受け、そのスコアで本人の英語能力を自覚してもらいます。その後、1年生の末、2年生の末に、それぞれTOEIC L&R IPテストを受けてもらい、そこでどれほど伸びたかを確認する、そしてどうすればもっと伸びるのかを考え、各自の目標を設定する。それらをできるように支援するのが、本カリキュラムのポイントです。

第2部 学習成果の検証・教員研修会

共通教育推進機構 コーディネーター 准教授

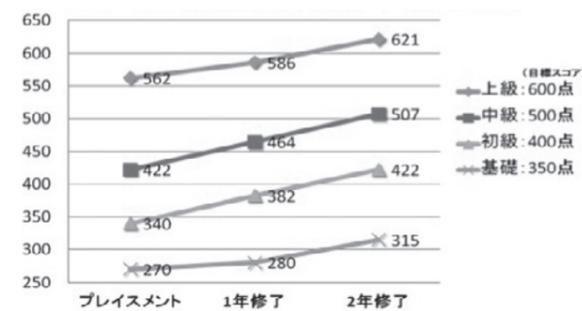
白杵 岳 氏

■ 2013～15年度生の学習成果

ここからは学習成果の検証と教員研修会 (FD) についてご紹介いたします。まずは、TOEIC L&Rに基づく学習成果の検証についてご説明します。以下の資料4は、2013年から2015年度生の2年間にわたる学習成果を平均値で表したものです。

(資料4)

2013～15年度生の学習成果<平均値>の変遷



*プレイズメントテストは、TOEIC Bridge Testの換算点である。
*上記データは、TOEIC L&R IPテストで高得点取得による単位認定により、英語カリキュラムを早期修了者のスコアを含む。2年修了時の得点は、各自の最高点となる。また、上記データは、在籍者のみの点数である。

このグラフは、入学時にプレイズメントテストとして実施されるTOEIC Bridge Testのスコアによってそれぞれのクラスに割り振られた学生が、2年間でどこまでスコアを伸ばせたかを表しています。基礎・初級・中級・上級のどのコースも平均値で80点ほど伸びています。これは良い結果であると考えています。それは、カリキュラムを作る際に目標としたスコアは、初級・中級・上級ともクリアしているということからも裏付けられます。しかし、基礎クラスに関しては、まだクリアしていないのでさまざまな可能性を加味しながら、これからのカリキュラムの方向性を検討しているところです。

■ 2015年度生の学習成果

次に、全体の平均値ではなく、平成27年度生のTOEIC L&Rスコアの上位3名に焦点を当てたのが(資料5)となります。まず、(資料5)の左列は、プレイズメントテストからのスコアの伸びのBEST 3となります。2位と3位が300点以上、1位の学生に至っては400点以上と大きな伸びを示しました。また、(資料5)の右列の最高スコアのBEST 3では、上位3名ともに800点台となっています。

(資料5)

2015年度生のTOEIC® L&R スコア



ここで注目していただきたいのは、各BEST 3にさまざまな学部の学生が入っていることです。これは、全学的取り組みである共通教育必修英語プログラムの特徴とも言えます。また、ある学部の先生からは、2年次までのスコアの伸びが良いので、3、4年次にも引き続きTOEICクラスを開講してほしいという要望をいただいています。そこで、TOEIC選択科目を充実させるなど対応をしているところです。

■ 上位クラスへの移行を“成功体験”として捉える

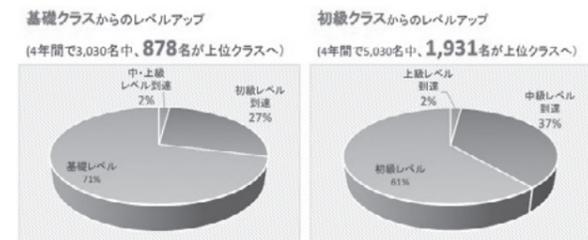
先ほどのカリキュラム概要説明であったように、本学のカリキュラムは上昇志向が一つのコンセプトです。学期末のTOEIC L&R IPテストで、上位クラスへ移行するようなスコアを取得し、自らの成長を実感できるような“成功体験”をしてほしいと考えています。そして、その体験に基づき、次の目標に向かっていってほしいと願っています。もちろん、TOEIC L&Rのスコアアップや上位クラスにレベルアップすること自体を成功体験とは捉えない学生もいるでしょう。ただ、大事なことは、英語カリキュラム自体が学生に成功体験を味わってもらうような機会を与えること、そして、それを可能にする授業というコンテンツを我々が学生に提供することだと思っています。

以下の(資料6)と(資料7)は、1年修了時に定期試験として受けたTOEIC L&R IPテストの結果によって、実際にこれまで新カリキュラムを受講した学生のうち何名が上位クラスへ移行することができたかを表しています。つまり、これまでこの新カリキュラムにおいて、何名が“成功体験”を経験することができたかを表しています。

まず、(資料6)が示すように、基礎クラスの約30%の学生が、初級レベルもしくは中・上級レベルに上がっています。初級クラスでは、中級レベルもしくは上級レベルに上がった学生が約40%。学生数としては5,030人中1,931名が上位クラスに上がっているということになります。

(資料6)

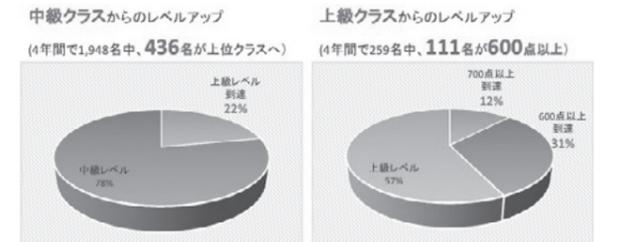
TOEIC® L&Rテストでの成功体験
(2013～16年度生の1年修了時)



次に、(資料7)が示すように、中級クラスでは500点以上の上級レベルに22%が到達し、上級クラスでも600点以上取った学生が43%もおります。

(資料7)

TOEIC® L&Rテストでの成功体験
(2013～16年度生の1年修了時)



これは、これまでの新カリキュラム受講生1万276名中、約3,300名が我々の考える“成功体験”を1年修了時に経験できたであろうと推測され、非常に良い結果であると考えられます。

■ 自らの成長を79%の学生が実感

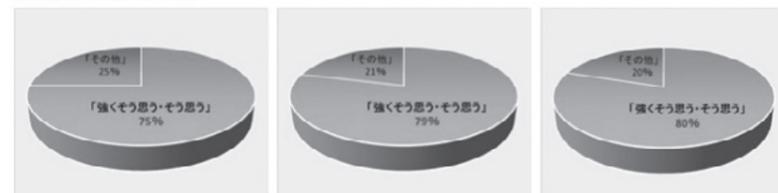
さて、では実際にどれだけの学生がこの新たな英語カリキュラムで自身の成長を感じていると考えられるでしょうか。自らの目標を立て、それを達成することで、自身の“成功体験”を経験することができているのでしょうか。これに関しては、新カリキュラムを受講する学生を対象に実施した授業の評価アンケートから垣間見えます。(資料8)は、新カリキュラムを受講した学生を対象に2年次に実施した授業評価アンケートの平均値です。それぞれの質問に対する選択肢は、「強くそう思う」「そう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5択になっています。

その中から、ここでは三つの質問に焦点を当てます。まず、「この授業を目標を持って受講することができたか?」という質問に対しては、「強くそう思う」「そう思う」という肯定的な回答が75%となりました。次に、「自らの成長を実感できたか?」という質問には、79%が肯定的な回答でした。最後に、「この授業に満足して

(資料 8)

授業評価アンケート
(2013～15年度入学生：2年次実施<平均値>)

Q1: この授業を目標を持って受講することができた。 Q2: 自らの成長を実感できた。 Q3: この授業に満足している。



いるか?」という質問には80%の受講生から肯定的な回答を得ることができました。これらは、共通教育必修英語という科目の数値としては、非常に高いと思います。その要因には、学生が目標を持って受講できたことがあると思います。実際に、TOEIC L&R IPテストの結果、上位クラスに上がった学生から、「先生、(上位クラスに)上がりました!」という喜びの声もよく聞きます。また、授業評価アンケートにおける自由記述欄で、「TOEICクラスを受けてみて、自分の成長がハッキリと分かった」「学生と教員のコミュニケーションが多いので、英語への興味が深まった」などのコメントも寄せられています。これは、客観的かつ具体的なTOEIC L&Rという目標設定をカリキュラムの中に組み込んだことで、学生が自らの成長を実感できたからではないでしょうか。つまり、上昇志向のカリキュラムの中で、多くの学生が自らの英語技能における成長を“成功体験”として捉えていると考えられるのです。

■ お互いに学び合う場としての教員研修会 (FD)

本学での共通教育必修英語カリキュラム改革のこれまでの着実な成果の背景には、効果的な統一教材、少人数制クラス編成、担当教員の努力など複合的な要因があると思います。しかしながら、最後に強調したいのはどんなカリキュラム改革であろうとも、新しいカリキュラムの枠組みを作るだけでは駄目だということ

です。枠組みを作っても、それが実際に機能しないとカリキュラム改革は期待された成果を出すことはできません。カリキュラム改革を成功へと導くには、(資料9)の図が示すように、大きく三つの要素が揃うことが必要不可欠であると考えています。

(資料 9)

教育内容の充実を実現するために



第1の要素は、これまで説明してきたように新たなカリキュラム自体が「上昇志向のカリキュラム・デザイン」であることです。カリキュラム自体が学生の成長を促す構成であることは、カリキュラム改革をする意義の中心的理由とも言えるものですし、これからの社会に必要な人材を育成するために必要不可欠なものでしょう。

一方で、第2と第3の要素は、新たなカリキュラムを効果的に運営し、期待された成果を出すために必要不可欠な要素となります。第2の要素は、「知識と経験と情熱のある教員」の存在であり、本学で言うところ

るの実学英语講師の先生方となります。本学の実学英语講師は、全員がTOEIC L&Rスコア900点以上のエキスパートであり、学生に対して日々熱心な指導をしてくださっています。先ほども説明したように、“成功体験”をするための充実した授業というコンテンツを学生に提供するためにご尽力くださっています。

第3の要素は、「教員・学生が学び合う環境」を整えることです。本学では、これを年に2回の実践的なTOEIC担当教員研修会 (FD) を開催することで可能にしています。この教員研修会 (FD) は終日行われ、新たな教授法に関する発表やテーマ・ディスカッションで構成されています。この教員研修会 (FD) は、教員同士が教授法をシェアし、教員としてさらなる成長をするための大切な機会となっています。実際に、この研修会に参加された先生方からは、「(TOEIC) 研修会は、どんなに(教員としての) 経験年数が長くても、自分の足りないところ、工夫できるところを実感できる貴重な機会であり、今後も実施してほしい」といったコメントが数多く寄せられています。

我々は、この「上昇志向カリキュラム」「知識・経験・情熱のある教員」「教員・学生が学び合う環境」の三つの要素が揃ったときに新たなプログラムがうまく機能し、期待した成果が出ると考えています。このように、本学では共通教育必修英語のカリキュラム改革を実施してきました。これまでの本学の取り組みが、本学の学生の成長を促し、社会に必要とされる人材育成とこれからの英語教育改革に一役かえるのであれば、それは幸いなことだと思います。

「実践的な専門力を有した国際人」を育成する東京都市大学オーストラリアプログラム「TAP」



程田 昌明 氏

オーストラリアへの留学プログラム、TAPの概要

国際部 部長
程田 昌明 氏

■ 専門教育を行う学部を中心に

私は、まず教務で5年間勤め、その後、総務で5年、また教務に戻って8年、そして国際部に移って5年目の、純粋な学校職員です。本日は、東京都市大学オーストラリアプログラム(TAP: TOKYO CITY UNIVERSITY AUSTRALIA PROGRAM)とTOEIC® Testsの活用・成果などについてお話しさせていただきます。

まず、東京都市大学についてご紹介します。東京都市大学は、前身が1929年創立の武蔵工業大学で、2009年4月に名称変更をして現在に至っています。6学部18学科、2研究科11専攻があり、学生は大学院生を含め約8,000名が在籍しています。さらに東京都市大学グループとして、幼稚園から小学校、中学、高等学校も併設しています。また、東急グループの一つでもあり、五島美術館や自動車学校なども運営しています。

学部は、工学部、知識工学部、都市生活学部、人間科学部、環境学部、メディア情報学部などがありますが、英語系や国際系の学部学科は一つもなく、理系の専門教育を行う学部が中心となっています。

■ 理系のニーズに合わせたプログラム設計

本学では、現在、2029年の創立100周年に向けて「アクションプラン2030」を策定し、取り組むべき七つのテーマを掲げています。そのうちの二つ目が教育で、二つ目がグローバル、三つ目が研究です。グローバルを教育と研究の間に置いているのは、教育と研究どちらもグローバルが関わらないと発展しないという思いが込められています。

グローバルの柱となるのが「国際人育成プラン」(資料1)であり、本日お話しさせていただくのは、1、2年生を対象とした初級プログラム、TAPです。

TAPは、TOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) のスコアで550点から650点あたりのレベルの学生の参加を対象としています。TAP参加で1、2年で英語力をつけた後、ネイティブスピーカーによる講座や専門科目の英語講義、海外研修プログラム、海外インターンシッププログラム、交換留学プログラムと発展させていきます。理系のニーズに合わせたプログラム設計をしていることが、TAPの特徴です。

(資料1)

国際人育成プラン



■ TAPの立ち上げ

TAPの目標は、英語ができるようになることだけではありません。実践的な専門力を有した国際人を育成する、特に自主性や自立心を高めることを目指しています。“準備教育プラス留学”というコンセプトのもと、本学独自のプログラムで設計しています。

TAPを立ち上げるに当たっての経緯を少し説明いたします(資料2)。

(資料2)

経緯(TAPを始めるまで)

- 2012年 11月 豪州進出計画 (International Campus City 構想)
- 2013年 1月 TCUAC構想推進室設置
- 2013年 5月 ECUとミーティング
- 2013年 7月 都市大グローバル化提案 (三木千壽国際担当副学長当時)
- 2013年 9月 TCUAC設立計画説明(学内)
- 2013年 11月 ECUとミーティング②
- 2013年 11月 計画変更 TCUAC → TCUPへ
- 2014年 3月 TAP運営準備室設置
- 2014年 5月 TAP実施理事会承認
- 2014年 12月 TAP事業計画理事会承認

まず、2012年11月、オーストラリアのパース郊外に「International Campus City」を建設するという計画を聞いたのが始まりです。非常に広大な原野で奥にはインド洋が見え、この地にキャンパスを造ると聞いて多くの大学がひるみ、誰も手を挙げませんでした。

そうした中、本学は同計画に興味を示し、TCUAC構想推進室を立ち上げました。約2年をかけて豪州進出の実現性を検討していきましたが、2013年11月に計画が変更されました。現地の開発での諸事情があり、当面キャンパスができないことが分かったのです。

ただ、本学としては、遅れていたグローバル化を何とかしなくてはいけないとの考えから、計画を一部修正し、キャンパスからプログラムにスケールダウンさせてTAPの前身を立ち上げました。そして、2014年3月には、TAPという親しみやすい名称に変更し、運営準備室を設置しました。学長を室長に、各学部の主要な先生方や事務関係者を迎えての運営となりました。

いざTAPの募集を始めるとなると、果たして学生が集まるのかという不安でしたが、200名の定員で募集をしたところ、初年度の2015年に244名、次年度に321名(定員232名)、今年度には334名の応募がありました。TAPは希望すれば誰でも行けるというのが特徴なのですが、定員を超えてしまったため、入学時に行うプレースメントテストの結果で選考することになりました。ただし、選考でもれた学生にも準備講座として英会話を学ぶ機会を提供し、フォローしています。現在300名近くの学生が準備講座を受けています。

それでは、TAPの内容については、昨年TAPを経験した福田有沙さんから紹介していただきます。

TAPでの学修を終えて



東京都市大学
都市生活学部3年生
福田 有沙 氏

■ 4技能全てを毎日学べるTAP

ただいまご紹介にあずかりました東京都市大学都市生活学部3年の福田有沙です。

私は、1年生の2月から2年生の6月までオーストラリアで過ごし、その後、7月から11月まで、交換留学生としてオーストラリアに留学していました。

TAPは留学前にまず準備講座を受けます。1年生時に国内で約1年間、英語をはじめ、留學生活の概要やビザの取得方法、海外での生活の仕方などを学びます（資料3）。

準備講座では、毎日、コミュニケーションの授業があります。また、週に2回のライティングの授業や講師との1対1のチュートリアル、TOEIC Tests対策としてリスニング、リーディング、ライティング、スピーキングの4技能全てを毎日学びます。

(資料3)

TAPの概要

準備教育+留学⇒本学独自の留学プログラム



■ TAPだけでTOEIC® L&Rスコアが200点アップ

日々の授業でネイティブの先生と英語でコミュニケーションをする機会があり、みんなで楽しく授業を受けています。例えば、ハロウィンのときには、どのチームが一番早くマミー（ミイラ）を作ることができるかというようなゲームをしました。

私が所属する都市生活学部は、例えば空間デザインの授業では、設計から模型の作成までを行います。TAPの授業が終わった後も、みんな夜の10時頃まで学校に残って模型づくりをするので、TOEIC Testsのために勉強をする時間はほとんどありません。英語を学べるのはTAPの100日間の授業だけです。しかし、入学時にTOEIC L&Rのスコアが500点以下だった私が、オーストラリアに行く前の12月の時点で700点にまで上げることができました。TAPの授業しか出ていなかったのに、200点も上がったことにとても驚きました。

■ 英語つきの毎日で英語力がアップ

オーストラリア留学中の授業は、留学前に受験するTOEIC L&Rや学校独自のテストでクラス分けされます。前半の9週間は英語科目、後半の7週間は教養科目を学びます。英語科目では5科目13単位、教養科目は合計4科目で8単位、TAPだけで合計21単位取れるので、4年間でスムーズに卒業できます。

前半9週間の英語科目では、ノンネイティブのクラスメイトとアカデミックイングリッシュを学びます。内容は一般的な英会話学校で行うものではなく、大学や大学院に入るための、英語でのレポートの書き方やディスカッションの仕方、プレゼンテーションの仕方などです。

私のクラスは12名で、うち3名が日本人、9名がインド人でした。その中で、テストやレポート、プレゼンテーションなどを全て一緒に学びました。インドの人たちは大学院に入るために一生懸命勉強していますし、かなり積極的です。おかげで私たち日本人は、9週間、容

赦なく英語のシャワーを浴びることができ、とても英語力がつきました。

また、毎週リスニングのテストがありました。これは、20分間、英語の講義を聞きながらメモを取り、講義で聞いた内容を基に、500字から800字程度のエッセーを書くというものです。「これはリスニングというより、ライティングだ」と、みんなで言うほど、ライティングも合わせて学べる内容の授業でした。このように、日々、課題やテストに追われながらの9週間となりました。

■ エディスコーワン大学での教養科目

その後の教養科目は、エディスコーワン大学(以下、ECU)で授業を受けました。その中のUrban Movement and Analysisという授業は、私の所属する都市生活学部の必修科目である“まちの観察”という科目に準じたTAP独自の科目です。帰国後に学部の必修科目に読み替えられるので、日本に帰ってから必修科目を取り直さなくてすむのです。これはTAPに参加する最大の利点かもしれません。

また、LEP(Learning Exchange Program)も興味深いものでした。オーストラリアには、日本や日本の文化に興味を持っている人が多く、ECUにも日本語学科があります。LEPは、その学科の学生から英語を学び、私たちは日本語を教えるという相互の語学交換プログラムです。私はオーストラリア人の学生と仲良くなり、放課後も一緒に遊びに行ったり、ご飯を食べたりしました。

■ 共同生活の中で英語力、生活力がアップ

学生寮は、ECUの敷地内にあり、大学までは徒歩5分程度でした。この学生寮の寮生活がとても楽しく、印象に残っています。

学生寮にはいろいろな国の留学生とオーストラリア各地の学生が住み、1部屋4名から6名の共同生活を

送っています。寮生活では、炊事から洗濯、掃除まで全て自分たちで行わなければならないので、その中でもずいぶん英語力が身に付く結果になりました。国の違い、例えばごみ捨てなどの文化も異なるので、全員がいかにか気持ち良く生活するかというところで話し合いをし、とても学びになりました。

TAPを終え、交換留学から日本に帰ると、周囲から積極的になったとか、自分の意見を言えるようになったとよく言われるようになりました。

現在、私は学生会という、学科の生徒会のようなものに参加し、会長を務めています。その会長としての責任感もありますが、TAPの参加と交換留学に行った経験を活かし、今後、学生会やゼミの後輩たちにも何かを伝え、教えていきたいと思い、活動の幅を広げています。

今後は、TOEIC L&Rのスコアをもっと上げなくてはいけないと思っています。リスニングは良いものの、リーディングがなかなか上がりません。TAPのプログラムの中でTOEIC® Speaking & Writing Tests(以下、TOEIC® S&W)の受験もできたので、今後は自主的に受けていきたいと思っています。

TAPの成果

国際部 部長

程田 昌明 氏

■ 重要なのはバランスのとれた人材育成

ここからはTAPの成果について紹介させていただきます。

(資料4)のアンケート結果では、「TAPに参加して満足しましたか?」という質問に対し、満足・大変満足の合計が83%となっています。また、「英語力はどの程度向上しましたか?」という質問に対しても、意思疎通ができるというレベルから、議論に参加できるというハイレベルなところまでを含め87%に達しています。

また、「次にチャレンジしたいことは?」という質問には、80%の学生が海外インターンシップや語学留学、交換留学、海外ボランティアなどと答え、次のステップへの意欲を見せています。

(資料4)

アンケート結果

- Q. TAPに参加して満足しましたか?
⇒満足+大変満足 **83%**
- Q. 英語力はどの程度向上しましたか?
⇒議論に参加+内容は理解+意思疎通が出来る **87%**
- Q. 次にチャレンジしたいことは?
⇒海外インターンシップ、語学留学、交換留学、海外ボランティア **78%**

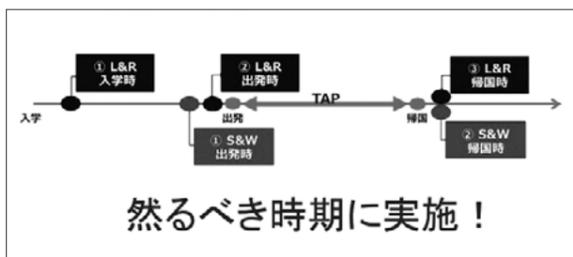
TOEIC L&Rの導入に関してよく聞く話に、4技能を測れない、内容がビジネス向けである、TOEIC S&Wはちょっと受験料が高いなどの意見があります。しかし、TAPでは、テストでの満点を目指しているわけではなく、自立した学生を育てる、社会が必要とする英語力を身に付けさせる、行動力を身に付けさせることが目的なので、ある程度のスコアが取れば良いと考えています。要はバランスのとれた人材を育成することだと思います。そのためには、TOEIC Testsでの効果測定は相応しいと考えています。

■ TOEIC® Testsでの効果測定

TOEIC L&Rの実施時期は、入学時、5月の連休前です。その後は出発前、最後は帰国後に受けてもらいます(資料5)。

(資料5)

TOEIC® Tests実施の時期



これまでTAPに参加した3グループ、3学期の平均を取ってみますと、入学時は平均400点で、出発前は60点ほど向上して460点、帰国後は500点となりました。留学ではあまり伸びていないように見えますが、トータル600人ほどの平均なので、こうしたスコアになっています。

TOEIC S&Wは出発前と帰国後に受けています。TOEIC® Speaking Test(以下、TOEIC® Speaking)では、出発前の86点だったところ、帰国後には102点と、平均16点アップしています。

大学1年生の平均スコアは90点、2年生の平均スコアは100点、大学生全体の平均は97点、留学経験6カ月未満の場合は平均99点で、これらとの比較ではTAP生の平均スコアが上回っています。背景として、授業や寮生活で英語を使うことで、TOEIC Speakingのスコアが伸びたと考えられます。

TOEIC® Writing Test(以下、TOEIC® Writing)では、出発前の104点から帰国後の121点へと、平均17点アップしました。全国の平均によると、1年生全学部が111点、2年生全学部が122点、大学全体と留学6カ月未満が119点であり、2年生を除きTAP生が若干上回っています。その理由には、留学中の授業は作文やエッセーが多く、書く力が付いたことが考えられます。

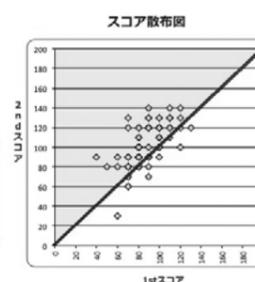
■ 74%の学生がTOEIC® Speaking Testのスコアを伸ばす

同様の内容をスコア散布図のグラフにして計測したところ、74%の学生がTOEIC Speakingのスコアを伸ばしていることが分かりました(資料6)。TOEIC Writingについても同様に、70%の学生が期待値よりもスコアを伸ばした結果が出ています(資料7)。

(資料6)

Speaking Testの分析

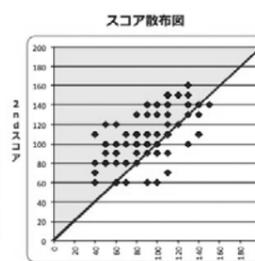
- ・青線より上に分布
- ・74%の学生がスコアを伸ばしている。



(資料7)

Writing Testの分析

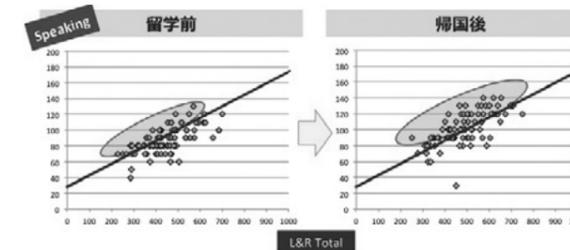
- ・青線より上に分布
- ・70%の学生がスコアを伸ばしている。



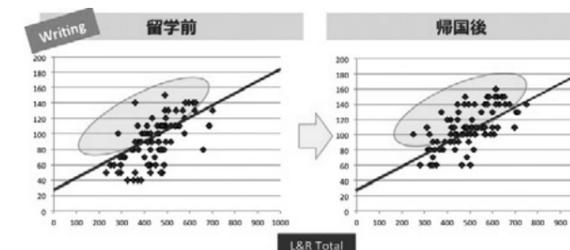
(資料8)は、TOEIC L&RとTOEIC Speakingのスコアを留学前と帰国後で比較したものです。横軸がTOEIC L&Rで、縦軸がTOEIC Speakingです。TOEIC L&R、TOEIC Speakingともにスコアを伸ばしていますが、特にTOEIC Speakingは多くの学生が期待値を上回っています。TOEIC Writingのスコアを留学前と帰国後で比較しても、同じような結果が出ています(資料9)。TOEIC L&Rも同様です。

TOEIC S&Wのスコアで160点を取った学生もいます。かなり高いレベルにあり、3年生で推奨している海外インターンシップにも積極的に参加しています。

(資料8)



(資料9)



■ TAPにとってTOEIC® S&Wは意義あるテスト

これまでTOEIC S&Wを受けた学生は700名以上おり、その学生たちからは「難しかったけど楽しい」「また受けたい」といったコメントを数多くもらっています。また、「1回目は何をやっていいかわからず、時間が終わってしまったので、また受けたい」という意欲的な声も少なくありません。

TAPでは特にテスト対策はしていません。それでもTOEIC S&Wのスコアが上がり、学生たちはびっくりしていましたし、私にとっても大きな驚きでした。TOEIC S&Wは決して難しいものではなく、社会人向けでもない。TAPにとっては、とても意義のあるテストだと思っています。

また、TOEIC Testsは発信力を身に付け、4技能を伸ばすこともできるということで4技能の測定に利用しています。TAPの成果を測る目的と、生徒のモチベーションをキープするために、TOEIC Testsのスコアを目安にしてアワード(賞)や奨学金制度を設けました。TAP参加に掛かる費用は90万円ですが、優秀者は30万円給費されるアワード(賞)や、参加費全額免除

になる入試特待生制度、さらに協力企業からバックアップを受けられる企業賞などがあります。これらは生徒たちにとっても有効だったようで、東京都市大学への入学者の変化にも繋がりました。TAPを始めた2015年には1学年約1,500名の入学生のうち、入試特待生は5～6名ほどしかいませんでしたが、現在は40名近くが入試特待生として入学しています。

■ 課題と今後の展開について

最後に、課題と今後の展開についてお話しします。

TAPの英語と教養の科目21単位は、他大学履修の単位認定を適用しています。実際、1年生の準備講座も単位は付いていませんが、昼休みと5、6時限で授業を受けています。今後はこれを単位化できるように学内調整したいと考えています。

また、帰国後のフォロー教育も徐々に整ってきていますが、まだインパクトのあるところまで至っておらず、海外インターンシップ枠の拡大についても、学生のニーズに合ったプログラムが提供できているとはいえません。現在、40名ほどの枠を設けていますが、毎回100名以上が留学しているので、それに合った枠の拡大が必要だと考えています。

将来的には、TAPの定員を500名まで増やしていく計画です。ECU以外の大学にも派遣先を拡大していくつもりです。

また、“大学に入学してみなければTAPに参加できるかどうか分からない”と不安に思っている受験生のために、TAP参加を前提とした入試制度を始めることも考えています。

Q&A セッション

第1部 各大学の英語教育について



広島大学 鬼田 崇作 氏
京都産業大学 松永 舞 氏
東京都市大学 程田 昌明 氏

TOEIC® Programの導入について

大学内でTOEIC® Programを導入する際、
課題や困難はありましたか？
また、それをどのように解決されたのでしょうか。

広島大学：鬼田 氏

広島大学がTOEIC® Programを最初に導入したのは2002年でした。初年度は小規模での使用に留め、翌年から大規模に導入したと伝え聞いています。

TOEIC Programを導入するまでは、英語の評価が先生によって異なるという問題がありました。客観的な英語力はこちらの学生の方が高いのに、先生の主観が入った相対的な授業評価は低い、ということが起こっていたのです。しかしこれでは、授業成績に基づき行われる奨学金の申請やコースの割り振りなどにおいて、学生に不利益を生じさせてしまいます。

学生の英語力を、客観的な指標によって適正に評価したいという思いから導入したTOEIC Programでしたが、学内からさまざまな声が上がったと聞いています。教員の専門性を捨て、TOEIC Programに対応する授業のみ行うのか、真の英語力、コミュニケー

ション力はTOEIC Programでは測れないのではないかと、といった意見がありました。これらの問題を解決するには、適正な評価とはどういったものなのか、また、その適正な評価が学生にとってどのような利益になるのか、ということを地道に説明していく必要があると思います。

TOEIC Programの導入を経て、現在の広島大学の教養教育における英語科目の評価方法はどのような形をとっているかと申しますと、科目名が同じ授業のシラバスは統一されるようになりました。授業目標と、その目標が達成されたかを評価するための評価規準と基準を明示し、全教員が統一のシラバスの下に教養教育を担当しています。その評価の目安として、TOEIC Programのスコアを利用しています。スコアの平均が高いクラスには、優や秀が付く割合が高いはずで、低いところはその逆となるはずで、このような形で、評価の目安を作成し、各先生方に提供しています。

京都産業大学：松永 氏

京都産業大学では、新たな共通教育必修英語カリキュラムとしてTOEIC Programを導入したため、一からの立ち上げという意味で大変さがありました。実際に、専門組織の立ち上げ、担当教員の確保、新しいカリキュラム開発と教材選定、教員研修会 (FD) の

実施方法など、さまざまな課題がありました。

これらの課題を解決するため、新カリキュラム導入に向けて約1年間の準備期間を設定し、まずは私も所属している共通教育推進機構という組織を立ち上げ、共通教育英語を担当する専任教員を配置しました。また、それまでの必修英語カリキュラムにご尽力いただいていた先生方に時間をかけて新カリキュラムに関して説明する機会を設けました。さらに、新しいカリキュラムの主力となる専任教員は、TOEIC Programの指導経験が豊かで英語教育への情熱がある先生方を実学英语講師として公募することにしました。実学英语講師という全く新しい職位での公募であったため、多少の不安もありました。しかしながら、実際には、予想以上の応募があり、経験豊かな方々に集まっていたことができました。そして、このことは非常に良い新カリキュラムのスタートに繋がったと考えています。現在も、この実学英语講師の先生方が、必修英語プログラムの柱の一つになっていることは言うまでもありません。

最後に、TOEIC Programを導入することだけでなく、実際には効果的なプログラムを維持し続けることも一つの大きな課題だと考えています。この課題を乗り越えるためには、まずは教員が常にお互いに学び合う意識を持ち、教員研修会 (FD) を通して教育の質の向上に努めることが大切だと思います。

東京都市大学：程田 氏

TAPは新規で立ち上げたプログラムであったこと、正課授業ではありませんので導入への難しさはありませんでした。ただ、TOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) のスコアを基に学生のレベルを学内の先生方や、派遣先大学の担当者に理解してもらうことに時間がかかりました。

例えば、ECUに交換留学するためにはIELTSの6.0が要求されます。これはTOEIC L&Rのスコアに換算すると、大体700～800点程度と考えることができます。TAP留学の場合は、特定の英語の獲得点数を

求められることはありませんが、送り出す学生の学力情報についてECU側と話し合うことが多くあります。その際、TOEIC L&R 400～600点のスコア保持者を送り出すと伝えてもピンとくることが少なく、相手との情報の共有にエネルギーを費やしました。

大学内でも似たようなことが起こりました。英検二級はTOEIC L&Rの点数ではおおよそ550点ぐらい、というイメージは湧くようですが、TOEIC L&Rの点数だけで会議を進めると、英語のレベルのイメージにバラつきがあるということがありました。

このように、TOEIC Programの導入に対して反対ということはありませんでしたが、学内の先生方や学生派遣先の先生方との英語レベルの共有についてはエネルギーを必要としました。

英語学習に対する動機づけについて

学生の英語学習に対する動機づけはどのように行われていますか？

モチベーションの上げかた、維持させる方法を教えてください。

広島大学：鬼田 氏

動機づけにかかわる要因には、さまざまなものがあると思います。先ほどの発表内にもあったCan-Doリストの整備なども動機づけを高める取り組みの一環として行っていますが、全学に向けては英語教育プログラムの整備やTOEIC® Testsでの目標点の設定などが挙げられます。大学院の研究科で、入科のためにTOEIC Testsのスコアを利用しているところもあります。教養教育につきましては、単位認定も行っています。

また、学習環境の整備として、外国語教育センターがオリジナルの教材を作っています。この教材

の一部を授業でも使用し、成績評価に組み込むことによって、授業外でも教材での自主学習を促しています。

他には、学習支援室を設置しています。曜日ごとに科目を分け、英語だけではなく、その他の教養教育の科目について相談することができます。該当の科目を専門としている大学院生を指導員とし、先生方はチューターとなり学習支援室の運営を支援しています。授業の中でのつまづきを克服したり、学習方法の相談をしたりする場所として提供しています。

現在は新たな施策として、読んだ冊数によって、教材を無料でプレゼントする多読マラソンを取り入れようと検討しています。

また本学独自の短期の留学プログラムであるSTART/START+プログラムにおいては、TOEIC L&R団体特別受験制度 (IP: Institutional Program、以下IPテスト) のスコアが候補者の選考において重視されることとなっており、これも学生の英語学習の動機づけを高める施策の一つです。

京都産業大学：松永 氏

「どのように英語学習に対する動機づけをするのか？」ということは、教育における永遠のテーマですので、一つの答えというものはもちろんないと思います。

本学の共通教育必修英語プログラムでは、学生の成長を促し、学生がそれを実感できるプログラムを目指しています。先ほどの発表でもお話ししましたが、TOEIC L&Rのスコアによって上位クラスへのレベルアップを可能としています。また、高得点取得者は単位認定制度によって必修英語の履修を早期に終わることができます。必修英語を早期に終えた学生は、英語選択科目やより専門性の高い内容を英語で学ぶ科目を履修できるようにすることで、該当学生が自らの成長を実感できるようなプログラムの体系化を試みています。TOEIC Programでは、スコアとして客観的な学習成果が提示されるので、学生自身の目標設置などに非常に向いているテストだと思います。

本学はクラスも20名ほどの少人数制ですので、教員と学生の距離が非常に近い授業ができます。学生は気軽に質問や相談に来ますし、教員も、気になる学生には積極的に授業前後に声掛けができます。例えば、学生が何度もTOEIC L&Rを受験していく中で、スコアダウンやスコアの停滞期も必ず訪れます。その際には、TOEIC L&Rの受験経験が豊富な教員たちが、経験談を交えて励ますという対応も日々行っています。このように恵まれた教育環境の中で、英語学習に対する動機づけを試みています。

東京都市大学：程田 氏

本校の動機づけに関して、二つの取り組みを紹介します。

一つは、英語のネイティブスピーカーと話す機会を設けるということです。例えば、東京都市大学は、科学技術振興機構 (JST) が実施しているさくらサイエンスプランという交流事業に採択されています。最短で1週間、主にアジア圏からの留学生がやってきますが、その学生をバディ (補助学生) という形でサポートする役目をボランティアで募集しています。他にも、ニューコロンプランに採択されたオーストラリアのウーロンゴン大学から3週間の留学生受入研修を本学で行った際には、TAP経験者がバディとなり、留学生をサポートしました。

このように、TAPを終えた後も学内において英語を話す機会を楽しめる仕組みを作り、モチベーションを維持させています。また、外国語共通教育センターの専任教員が企画する留学研修や語学研修に、TAP経験者は積極的に参加して英語力の維持に努めています。

次に、TOEIC L&R IPテストの活用が挙げられます。3年生になると学生は就職活動を始めますが、履歴書に書けるほどのTOEIC L&Rスコアを持っていない学生が多くいます。外国の方と英語での会話はできるのですが、スコアが追いついていないのです。そこで、

国際部が窓口となり、3回連続でTOEIC L&R IPテストを受験するよう呼びかけています。初めに受験したスコアから最終的な目標点数を設定し、まずは次のテストで何点上げるかを考えます。段階的に目標のスコアを達成できるよう、TOEIC L&R IPテストの受験料は同窓会から補助をいただき学生負担を2,000円にし、学生のお小遣いで受験できるようにしました。また、TOEIC L&Rの公開テストが実施されない8月にも学内でIPテストを実施し、受験機会を増やすことによって学生のモチベーションが低下しないように工夫しています。

大学入試における英語4技能について

現在の英語4技能入試への対応と
今後の取り組みについて教えてください。

広島大学：鬼田 氏

広島大学では今、2019年度入試から二つの条件を満たした者に対して、大学入試センター試験の英語の得点を満点とみなすことが決定しています。

条件の一点目は、大学入試センター試験の外国語のうち、英語(リーディングおよびリスニング)を受験していること(聴覚障害者でリスニング免除者はリーディングのみ受験可)。二点目は、各入試の出願期間最終日までに、ある特定の英語外部検定試験にて当該スコア・等級を獲得したことを証明する書類の原本を提出することとなります。

外部試験にはCambridge English、英検、IELTS、TOEFL iBTなどがあります。その中でTOEIC Testsに関しましては、TOEIC L&R785点以上およびTOEIC® Speaking & Writing Tests(以下、TOEIC® S&W)310点以上となっています。この程度

の点数が高校3年生の時点で取れていれば、センター試験の英語は満点が取れるだろうと推定しての対応となります。

京都産業大学：松永 氏

本学では、2017年度入試より総合評価型である公募推薦入試において、英語4技能を意識した変更を加えました。以前より、語学、簿記、情報処理等の資格取得者は評価をし、加点してきましたが、昨年度からはTOEIC S&Wを加えたり、IELTSなども評価する資格として加えました。その際の評価基準は、CEFRに準拠しています。

また、センター試験利用の入試に関しては、2018年度入試より、英語の資格、検定試験で一定以上の資格・スコアを有する者については英語を満点にして合否判定を行うという制度を設けました。今後は、一般入試も含めた入試制度全般にわたり、外部試験の資格やスコアを評価に加味するかなど、検討を進めていく予定です。

東京都市大学：程田 氏

現在本学では、一般入試において外部試験のスコアが適用されています。外部試験を受けた場合のスコアのみ、①外部試験のスコアを提出する ②本学の入試制度の英語科目を受験する ③本学の入試制度の英語科目を受験し、外部試験のスコアとどちらか高得点のものを採用する、という三つの選択肢から選べるようにしております。

この場合の外部試験はTOEIC Testsをはじめ、英検などいわゆる一般的な外部試験が対象となっています。TOEIC L&Rスコアに関しては先ほどの広島大学さんと同様、785点という設定になっています。

Q&A セッション

第2部

それぞれの大学における特徴的な英語教育への取り組み

広島大学へのご質問

Can-Doリストの開発にあたり、作成に要した期間、苦勞した点はありましたか？
また、新しい気づきを得られた点についてもお聞かせください。

作成に要した期間は約1年間です。リスト作成にあたり、Can-Doステートメントとして、学生たちが現在の自分の実力を知るために英語4技能プラス、ファンクションとインタラクションの計6領域に関する質問が100項目設けられました。これらの項目は共同研究を行った一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会より支給いただき、それを基に学生から1年間にわたって横断的かつ縦断的にデータをとって、本学のCan-Doリストを作成しました。このベースとなる質問項目があったので、1年間でCan-Doリストの作成ができたのだと思います。

苦勞した点は、得点上位層のデータの薄さです。大学1年生を対象に主なデータを取ったこともあり、TOEIC L&R800や900点を超える学生はそれほど多くありません。900点を超える人数に関しては数名程度です。データの量が少ないため、結果が安定せず、一人のデータが与える影響が大きくなってしまいます。これは現在も苦勞している点となり、今後上位層のデータを足していくということが課題の一つになっています。

また、本日発表内でご紹介したMaharaの実践に関しましては、現段階では二つの学部、学科にまたが

る小規模で試験的な導入に限られているため、新しい気づきはまだまだありません。今後大規模に展開していく際にはどのようにデータを管理し、実際の運営につなげていくかが問題点となると考えています。

京都産業大学へのご質問

TOEIC Bridge® Testをクラス分けテストとして利用されている感想をお聞かせください。
また、具体的なクラス数、各クラスのレベルも合わせて教えてください。

本学ではTOEIC Bridge® Testによるクラス分けが5年目に入りましたが、うまくいっていると考えています。先ほどの発表の通り、本学ではTOEIC Bridge Testをプレイメントテストとして活用し、基礎、初級、中級、上級の四つのレベルの習熟度別クラス編成を行っています。実際の授業運営もスムーズに行っていることに加え、1、2年の学年末に定期試験として行うTOEIC L&R IPテストのスコアも4レベル間で明らかかな差が生じており、TOEIC Bridge Testでの習熟度別クラス編成がうまくいっている一つの根拠になると考えます。各クラスのボリュームにつきましては、初級が一番多く、今年度では約40%が初級です。先ほどの発表でもご報告したように、初級の多くの学生たちは1年間の学習を通して大きく成長してくれています。

TOEIC Bridge Testは1時間で終わるため、高校

を卒業したての学生たちを対象とするには最適だと考えています。短い時間できちんとしたレベル分けができるというのがTOEIC Bridge Testの最大の魅力であり、今後もプレイスメントテストとして活用していくつもりです。

東京都市大学へのご質問

留学の事前事後に受験するテストには、TOEIC® Tests以外の候補はありましたか？

また、数ある選択肢の中でTOEIC® L&RとTOEIC® S&Wを選択した理由はなんだったのでしょうか。

留学前後に受験するテストには、IELTSも候補に挙がりました。IELTSを採用した場合、留学前と留学後、2回の受験となりますが、1回の受験料は2万5,000円ほどかかります。受験費用が高い、また、学生のレベルに少しあっていないと感じたので、IELTSは選択しませんでした。また、TOEIC L&Rの点数は400点前後から得点となりますので、現時点でのTAP留学前受験者にとって励みになりやすいということがありました。

発行月：2017年10月

発行：一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC)

東京

〒100-0014 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル
TEL (03) 5521- 5012 FAX (03) 3581-5512

名古屋

〒460-0003 愛知県名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル
TEL (052) 220-0282

大阪

〒541-0059 大阪府大阪市中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル
TEL (06) 6258-0222

公式サイト

<http://www.iibc-global.org>

ETS, the ETS logo, PROPELL, TOEIC, TOEIC BRIDGE are registered trademarks of Educational Testing Service, Princeton, New Jersey, U.S.A, and in Japan under license.



当協会はプライバシーマーク
を取得しています。

10940007

本書の無断転載・複製を禁ず